

二〇一六年九月二十四日（土） 午後二時―四時 作成 清原章夫

今月の音楽

一・ヨハン・セバステイアン・バッハ（独・一六八五〜一七五〇年）

『ドイツ・オルガン・ミサ』より『前奏曲とフーガ 変ホ長調』BWV. 五五二

（二）演奏 ヘルムート・ヴァルヒャ・オルガン 録音…一九七〇年九月

（二）場面 クリストフが祖父と一緒に教会に行き、オルガンを聴く場面の音楽。初めてオルガンを聴くクリストフの描写が印象的である。

「彼は祖父といっしょに教会堂にいる。退屈してくる。たいへん気づまりである。（中略）突然どつと音響がする。オルガンがひかれてるのである。彼は背筋にぞつと戦慄を感じる。ふり向いて椅子の背に頤（あご）をのせる、そしてごくおとなしくしている。彼にはその音響がさっぱり腑（ふ）に落ちない。それが何を意味するのか少しも知らない。それはただ輝き渦巻いて、何にも見分けられない。けれども快いものである。もう一時間も前から、退屈な古い家中で、ぎごちない椅子にすわっていること、その気持がどこかへ行ってしまう。鳥のように空中に浮かんでる気がする。そして音響の大河が、いくつもの丸天井を満たし、壁にはね返されて、会堂の隅（すみ）から隅へ流れわたる時には、自分の身体もそれに運ばれ、翼を搏（う）つてあちらこちらと飛び回り、その誘いに身をうち任せるのほかはない。自由であり、幸福であり、日が輝いている……。彼はうつらうつらと居眠りをする。

祖父は彼にたいして不満である。彼はミサに列して行儀が悪い。」（岩波文庫四一〜四二頁）
（三）曲目解説 『ドイツ・オルガン・ミサ』は、バッハが出版したオルガン曲で、最初でかつ最大の作品集である。曲集の構成は、全二十七曲で、二十五曲を挟むような形で配置されるのがこのプレリユードとフーガ変ホ長調である。

二・ヨハン・セバステイアン・バッハ（独・一六八五〜一七五〇年）

『ドイツ・オルガン・ミサ』より『深き淵より、われ汝に呼ばわる』BWV. 六八六

（二）演奏 ヘルムート・ヴァルヒャ・オルガン 録音…一九七〇年九月

（二）場面 酔っぱらったメルキオルが、クリストフを抱きしめて泣きながら歌った曲。

「そしてまず子供の耳を引張りながら、呂律（ろれつ）の回らぬ早口で、子供が父にたいしていただくべき尊敬について説教を始めた。それから彼は突然気を変えて、子供を抱き上げながら訳の分らないことをしゃべり出して、笑いこけた。がふいに鬱（ふさ）ぎ込んでしまった。子供や自分自身の身の上を悲しんだ。子供を喉（のど）がつかまるほど抱きしめ、やたらに接吻し、涙をそそいだ。そしてしまいには、子供を揺ぶりながら、深き淵よりを歌い出した。」（岩波文庫八十四頁）

（三）曲目解説 マルティン・ルターが一五二三年に作詞作曲し、ルターの協力者ヨハン・ワルターが一五二四年に編曲したコラール（教会歌）。バッハの『ドイツ・オルガン・ミサ』およびオルガン教会カンタータBWV.三八「深き淵より、われ汝に呼ばわる」に取り入れられている。『歌詞』深き淵から、主よ、私はあなたに呼びかけます、主よ、私の声を聞いてください。どうかあなたの耳を傾けて、私の嘆き祈る声を聞き取ってください。（詩編一三〇番一二節）

三、ベートーヴェン（独・一七七〇〜一八二七年） 序曲『コリオラン』 作品六二一

（一）演奏 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー…指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
録音…一九四三年六月

（二）場面 クリストフが自作自演をした演奏会の序曲。

「そのうちに、いよいよ始めなければならなくなった。聴衆は待ちかねていた。宮廷音楽団の管弦楽（オーケストラ）は、コリオランの序曲を奏し出した。子供はコリオランもベートーヴェンも知らなかった。彼はベートーヴェンの曲をしばしば聞いたことがあったが、それと知らないで聞いていたのだった。かつて彼は聞いてる作品の名前を気にかけていたことがなかった。自分で勝手な名前をこしらえ出してそれに名づけ、その主題に、小さな物語やあるいは小さな景色をあてはめていた。彼は作品を普通三種に分類していた。火と土と水とであった。そしてそのおのおのにまた無数のいろんな細かい差異があった。モーツアルトは水に属していた。川端の牧場や、河上に漂う透きわたった靄（もや）や、春の小雨や、あるいは虹（虹）であった。ベートーヴェンは火であった。ある時は、巨大な炎と広大な煙とをたてる烈火であった。ある時は、燃えてる森であり、電光のほとばしり出る恐ろしい重い雲であった。ある時は、燦爛（さんらん）たる光に満ちた大空であって、九月の麗わしい夜に、一つ離れて滑り落ち静かに消えてゆく、見ても胸踊るばかりの星が一つ、そこに見えていた。この音楽会の時もまた、その勇ましい魂の熱火がクリストフを焼いた。彼は炎の急湍（きゆうたん）に巻き込まれた。その他はすべて消え去った。その他はすべて彼にたいしてなんであったか？」（岩波文庫一六二〜一六三頁）

（三）曲目解説 ベートーヴェンの友人で、ウィーンの宮廷秘書官を務め、また法律家で詩人でもあったハインリッヒ・ヨーゼフ・フォン・コリン（一七七一〜一八一一年）の同名の、古代ローマの英雄コリオランを主人公にした戯曲に触発されて一八〇七年に作曲された。コリオランは、プルータコス「英雄伝」に登場するローマの英雄で、政治的な対立から国外追放となったコリオランは、隣国の将軍となり大軍とともにローマに攻め寄せるが、母と妻の忠告で再び祖国側についたので殺されてしまうという悲劇的なものである。曲はコリンに献呈された。

四、モーツアルト（奥・一七五六〜一七九一年）

ヴァイオリン・ソナタ第三十三番 K. 三七七 第一楽章アレグロ

（一）演奏 アドルフ・ブッシュ…ヴァイオリン ルドルフ・ゼルキン…ピアノ 録音…一九三七年
（二）場面 クリストフが自作自演の前にメルキオルと合奏した曲。

「メルキオルがついに出来た。彼は聴衆の上機嫌（きげん）に得をして、かなり熱烈な喝采（かつさい）で迎えられた。奏鳴曲（ソナタ）が始まった。少年は一心になって口をきつと結び、鍵（キイ）の上に眼を据え、小さな足を椅子（いす）から垂れて、一糸乱れない確実さをもって演奏した。楽曲が展開してゆくにつれて、彼はますます落着いてきた。あたかもよく知ってる友人らの間にいるような気がした。賞賛のささやきが一つ彼のところまで聞えてきた。すべての人々が黙って聞きとれ感心していると考えながら、高慢な満足の念がむらむらと頭の上ってきた。しかし演奏を終えるや否や、また不安の念にとらえられた。喝采をもって迎えられると、嬉（うれ）しいよりもむしろ恥しかった。」（岩波文庫一六五頁）

（三）曲目解説 一七八一年の夏にウィーンで作曲され、弟子のアウエルンハンマーに献呈した。力強く下降するダイナミックな主題で勢いよく開始する。モーツアルトの研究家アルフレート・アインシュタインがこの楽章を「正に嵐のようだ」と評したように、三連音が輝かしいばかりに全曲を支配している。